

実践論文

まちなかの地域資源を活かした公民学連携による 体験プログラムの可能性

—和歌山市駅周辺における「市駅まちぐるみミュージアム」の実践を通じて—

Prospect for development of experience programs with use of local resources in the downtown area through partnership among public, private and academic sectors:

– Practical study of “Shi-eki Machigurumi Museum” held in the surrounding area of Wakayama-shi station–

永瀬 節治¹、柿木 理菜²、赤澤 由真²、和田 隼斗²

Setsuji Nagase, Rina Kakinoki, Yuma Akazawa, Hayato Wada

1 和歌山大学観光学部、2 和歌山大学観光学部生

キーワード：地域資源、体験プログラム、都市観光、まちづくり、実施体制

Key Words : local resources, experience programs, urban tourism, community development, management system

Abstract :

In recent years, many kinds of experience programs for urban tourism with use of various local resources are gaining popularity throughout the country. As one of such programs, “Shi-eki Machigurumi (area-wide involvement) Museum” was held through partnership among public, private and academic sectors in the surrounding area of Wakayama-shi station in 2016. Firstly, we explain its background and contents based on our practical experience. Secondly, we analyze the results of two questionnaire surveys : one is that of the program participants and the other is that of the hosts of individual programs. At the conclusion, this study clarifies the significance of such programs in terms of community inclusion and revaluation of local life, while mentioning the improvement toward preferable program management in a sustainable way.

I. 研究の背景と目的

近年の観光振興においては、地域に潜在する多様な資源を活用したいわゆる「着地型観光」が着目され、国内各地の都市観光や産業観光、グリーン・ツーリズム等の一環として様々な体験型プログラムの実施例が広がりを見せている。そうしたなかで、観光庁も「ニューツーリズムの振興」を掲げ、体験・交流型の観光を推進している¹。十代田（2011）は、近年の地方都市で展開されるタウン・ツーリズムやグリーン・ツーリズム等を包含する概念としての「オルタナティブ・ツーリズム」を、従来のマス・ツーリズムが与える非日常的感覚ではなく、異なる日常的感覚としての「異日常」を体験するものとして位置づけている²。このような観光は、従来の有名観光地が有するような第一級の観光資源に限らず、身近な産業・生業、生活文化や物語に光を当てることで、あらゆる地域で成立可能なものである。

地域での体験に根ざした観光は、多様な地域資源を活用

しながら、地域住民と来訪者との交流を通じて地域の活力を向上させる「観光まちづくり」の視点³からも着目されるものであり、地域社会を活性化する効果も期待される。西村（2009）は、地域環境の維持・向上運動としてのまちづくりと、地域環境の利活用による地域経済の推進活動を基盤とした観光の本質的な立場の違いを踏まえた上で、近年の社会経済環境の変化における両者の接近を捉えつつ、地域社会・地域環境・地域経済の三者の持続的な関係を築くための地域マネジメントのアプローチの一つとして「観光まちづくり」を位置づけている⁴。このような地域マネジメントの視点に立つならば、地域資源を活用した体験プログラムを、いわゆる観光業とは必ずしも直接的関わりのない、地域の多様な主体によって運営することは、まちづくりの取り組みを基礎とした観光への展開を図る上で、あるいは観光の視点を取り入れながら地域環境の改善やコミュニティの活性化を図る上でも、有効な手法の一つになり得る。

都市観光における地域資源体験型プログラムの導入事例は、長崎市で2006年に開催されたまち歩き型博覧会を契機に通年プログラム化した「長崎さるく」や、別府市の温泉街の魅力や人材の活用による地域づくりを目指して開催された「ハットウ・オンパク」（2001年～2010年）、およびその手法を導入した各地の「オンパク」事業をはじめ、全国に広がりを見せている。和歌山県内でも御坊市・日高地域の「御博」（2015年～）、紀の川市の「ぶる博」（2017年）などが展開されている。

一方、これらの取り組みに関する既往研究については、地域活性化手法としてのオンパクの考え方や効果等を扱った研究⁵のほか、歴史的環境を基盤とする事例を取り上げた研究として、山口県萩市の「萩まちじゅう博物館」における一連の文化遺産マネジメントに関する研究⁶や、千葉県香取市佐原地区におけるまちづくりを下地とした観光の展開を扱った研究⁷などが見られるものの、今後のさらなる事例研究の蓄積が求められる。

本稿では、地方都市の（歴史的環境が豊富には受け継がれていない）一般市街地における新たな都市観光の可能性を視野に入れたまちづくりの試みとして、2016年9月から10月にかけての18日間、和歌山市駅（以下、市駅）周辺の市街地において筆者らが企画し、公民学の連携により実施した「市駅まちぐるみミュージアム」の事例を取り上げ、市駅周辺のまちづくりにおける経緯と実施内容、参加者・各プログラム主催者へのアンケート調査の結果等をもとに、まちなかの地域資源を活用した体験プログラム展開の意義と可能性、課題について明らかにする。

Ⅱ. 「市駅まちぐるみミュージアム」の開催経緯とプログラムの内容

1. 開催に至る経緯

和歌山大学観光学部永瀬研究室（都市・地域デザイン）では、2011年の秋から、市駅周辺の自治会・商店街とともに「市駅まちづくり実行会議」を発足させ、同年11月から「市駅まちづくりワークショップ」（以下、ワークショップ）を定期的に開催し、地域の関係者や市民とともに、市駅周辺のまちの将来ビジョン構築とアクションの共有化に向けて議論を重ねてきた⁸。またワークショップで共有された考え方を踏まえ、2020年の市駅ビルのリニューアル⁹を見据えた今後の歩行者優先型の市駅前通り（市道と歌山市駅前線）の姿を実証的に提示すべく、2015年と2016年には「市駅“グリーングリーン”プロジェクト～市駅前通りを緑と憩いの広場に作る社会実験～」を実施し、公共空間の効果的な活用による人と環境にやさしいまちづくりの実現に向けた取り組みを進めている¹⁰。

一方、これまでのワークショップにおいては、市駅前通りの他にも、市駅周辺のまちづくりの手がかりとなるさまざまな地域資源の存在が認識されてきた。城下町の記憶を伝える旧外堀

としての市堀川、寄合橋や藩校跡、毎年3月下旬に開催される「孫市まつり」等を通じて発信されてきた雑賀衆・雑賀孫市や、その拠点として戦国末期には浄土真宗の本拠地となった鷺森別院、博物学・生物学・民俗学の領域に多大な功績を残した世界的な偉人・南方熊楠ゆかりの世界一統の酒蔵などは、歴史的市街地としての市駅周辺エリアならではの魅力になり得る。また、市駅前の商店街は著しく衰退しているものの、こだわりの商品を扱う店舗や、リノベーションによる新たな店舗などが見られるとともに、市民図書館、市立博物館、子ども科学館といった公共施設も集積し、何より歴史あるターミナルとしての市駅そのものの存在価値もあらためて確認された。

こうした市駅周辺エリアに見られる複数の地域資源を束ね、具体的に活用する試みとして、筆者らの研究室が中心となって企画したのが「市駅まちぐるみミュージアム」である。

2. 趣旨と目的

前節で述べたように、市駅周辺には中世・江戸から近代の記憶を伝える歴史的資源、こだわりのある店舗、文化活動の拠点となる公共施設が存在している。しかし、これらはまとまった形で情報発信がなされず、個々の主体によって独自に活動が展開されているため、一般市民や来訪者の側からは市駅周辺エリアの魅力や特色として十分に認識されていない現状がある。

そこで、これらをまちなかの地域資源として統合的に捉え、それぞれの魅力にじかに触れることのできる体験型プログラムを、多様な関係主体の協力を得て「まちぐるみ」で展開することにより、市駅周辺の魅力を発掘し、地域の内外に発信する試みとして「市駅まちぐるみミュージアム」を企画した。

本企画は、主として以下の2点を目的としている。

- 1) 市民による地域資源の発掘・再認識を促すことで、市駅周辺の潜在的な魅力を活かしたまちづくりの可能性を探る。
- 2) 地域の多くの主体の協力を得ることにより、地域コミュニティの協働体制や連帯意識を深める。

3. 実施内容

(1) 社会実験の日時と概要

本企画は、市駅前で社会実験「市駅“グリーングリーン”プロジェクト2016」の一環として実施したものである。2016年の社会実験は、①くすのき広場（市駅前通り歩行者天国）、②市堀川クルーズ、③市駅まちぐるみミュージアムの3つの企画により構成され、2015年にも実施された歩行者天国とクルーズに対し、市駅まちぐるみミュージアムは新たな試みとして実施されることとなった。

実施期間は、社会実験全体の核となる歩行者天国は9月30日（金）から10月2日（日）の3日間、市堀川クルーズは10月1日（土）・2日（日）の2日間であり、これらの実施日時をメイン期間と位置づけた上で、9月15日（木）から10月2

日（日）までの18日間を、「市駅まちぐるみミュージアム」の実施期間とした。なお同時期の和歌山市においては、京橋駐車場を活用した水辺の出店イベント「和歌山城下・まちなか河岸にぎわい横丁」（9月28日～10月2日）、和歌山城でのキャンドルイルミネーションイベント「竹燈夜」（10月1日・2日）、まちなかでの飲み歩きイベント「城下町バル」（10月1日）が開催されており、これらのイベントとの相乗効果も意図して期間を設定した。

社会実験の各企画の概要は表1の通りである。

表1 社会実験「市駅“グリーングリーン”プロジェクト2016」の概要

企画名	実施期間	実施場所	概要
くすのき広場 (市駅前通り歩行者天国)	<3日間> 9/30(金)～10/2(日)	市駅前通り(市道と和歌山市駅前線)の北進車線のうち舟大工町交差点～シャインビルフクシマ前の約150m	左記の区間を歩行者天国化し、以下の3つのエリアを設けて各種企画を展開。 ・芝生エリア:ピクニック、森の茶室、音楽ステージ等 ・オープンカフェエリア:キッチンカーの設置、ビアガーデン、アウトドアショップによるイベント等 ・マーケットエリア:市内・県内のこだわりの産品等の販売、和歌山大学LIPによる出店など。
市堀川クルーズ	<2日間> 10/1(土)～10/2(日)	市駅前(坂田ふとん店横)～京橋前(京橋駐車場・まちなか河岸会場前)の市堀川	市堀川の風景を体感するクルーズ船を運航。
市駅まちぐるみミュージアム	<18日間> 9/15(木)～10/2(日)	和歌山市駅～ぶらくり丁周辺の店舗・公共施設等	市駅周辺の歴史文化・生業・食などに触れられる計45の体験プログラムを実施。

(2) プログラムの概要

18日間にわたる「市駅まちぐるみミュージアム」の開催期間において、市駅前エリアの歴史や生活文化、生業、魅力的な空間に触れられる45のプログラムが企画された。それらに内容に応じて「わかやまの歴史と営みを知る」「こだわりの技術に触れる」「手しごとに親しむ」「わかやまの食を味わう」「秋の夜長を愉しむ」の5つのカテゴリーのもとに位置づけ、情報発信を行った。「わかやまの歴史と営みを知る」は展示・講座などのプログラムが中心だが、その他はいずれも生業や食・伝統文化等に関する体験型のプログラムとなっている(表2)。

これらのプログラム主催者の内訳を見ると、店舗営業の商業者によるものが29件で全体の7割近くを占めるが、市民図書館や市立博物館、こども科学館といった市の公共施設によるものが6件、筆者らを含む和歌山大学の研究室や関係者によるものが4件、市民団体によるものが3件、民間事業者によるものが2件、民間企業と大学研究室の共催によるものが1件となり、公民学の垣根を超えた協力体制が構築された(図1)¹¹。

各プログラムの実施期間は、2～4日のものが21件、1日のみのものが19件、5日以上のが5件であった。特にプログラムNo.1「市駅と南海の歴史展」は18日間を通して開

催され、会場となった市駅改札前の区画では、改札前の窓ガラスにプログラム一覧を大きく貼り出すとともに、パンフレットを配布する等、まちぐるみミュージアム全体のインフォメーションとしても機能することが意図された。

プログラムへの参加条件に関しては、体験料・定員・事前申込が必要でプログラムがそれぞれ半数程度を占めた。全プログラムの中でも、クラフトや菓子づくりなど、主催者側での材料調達が必要な体験プログラムの多くが事前申込制を導入し、あわせて定員と体験料を設定する傾向が見られる。申込締切については、細かく日時を設定していないプログラムも見られ、定員が埋まり次第、応募を締め切る形がとられている(図3)。

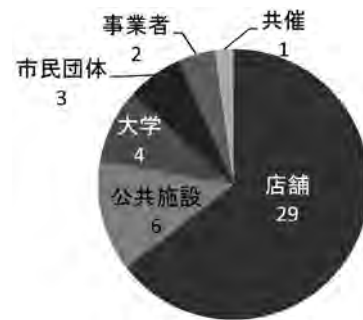


図1 プログラムの主催者 (n=45)

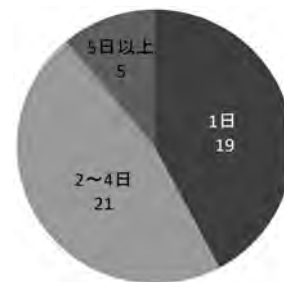


図2 プログラムの実施期間 (n=45)

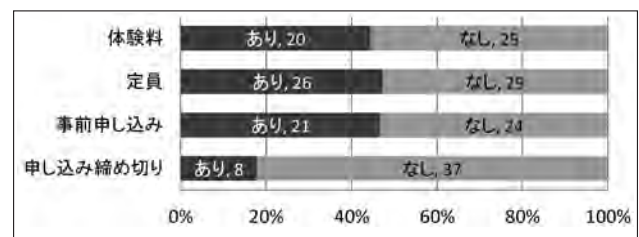


図3 プログラムの参加条件 (n=45)



図4 紅茶の淹れ方レッスン (No.39) の様子

表2「市駅まちぐるみミュージアム」のプログラム一覧

テーマ	No.	主催者	開催場所	プログラム名	実施期間	事前申込	定員	申込締切	体験料
和歌山の歴史と まちを知る	1	南海電鉄和歌山支社 和歌山大学観光学部永瀬研究室	南海電鉄和歌山市駅 2階改札前	市駅と南海の歴史展	9月15日(木)～10月2日(日) 平日:13時～19時30分 土日・祭日:10時～17時	—	—	—	—
	2	孫市の会	本願寺観音別院 1階ホール	出張!孫市城	9月15日(木)～17日(土) 17時～20時30分	—	—	—	—
	3	(有)出来助本店	本願寺観音別院 1階ホール	火縄銃と小道具展	9月15日(木)～17日(土) 17時～20時30分	—	—	—	—
	4	和歌山市立博物館	和歌山市立博物館 2階講義室	古写真でみる和歌山	9月17日(土)、24日(土)14時～15時	—	各回100名	—	一般100円 (入館料)
	5	和歌山大学観光学部 永瀬研究室	木下ビル1階	市駅まちづくりギャラリー	9月30日(金):13時～19時 10月1日(土)、2日(日):11時～17時	—	—	—	—
	6	和歌山市民図書館	和歌山市民図書館 3階ホール	ヘンリー杉本と 北米日本人収容所	10月1日(土)11時～12時	—	40名	—	—
	7	酒の道場 花野酒店	酒の道場 花野酒店	マブ女王と森の長老たち	10月1日(土)13時～17時	—	—	—	—
	8	和歌山市立博物館	和歌山市立博物館 2階講義室	紀伊湯大庄屋と 徳島の庄屋	10月2日(日)14時～15時30分	—	100名	—	一般100円 (入館料)
こたわりの 技術に触れる	9	(株)をぐらや	をぐらや	招き猫絵付け体験	9月15日(木)～10月2日(日) 10時～18時	—	—	—	1500円
	10	(株)家ノ谷沢	家ノ谷沢	高齢者体験ワークショップ	9月15日(木)～17日(土)10時～16時	—	—	—	—
	11	(株)家ノ谷沢	家ノ谷沢	ノルディックウォーク体験	9月17日(土) 13時～14時、15時～16時	—	各回20名	—	—
	12	和歌山市立こども科学館	和歌山市立こども科学館	ふくろう笛をつくろう	9月18日(日)、25日(日) 15時～15時20分	—	各回24名	—	小人100円 大人300円 (入館料)
	13	ファミリーショップクイノセ	ファミリーショップクイノセ	ストロー笛・ふくろう笛をつくろう	9月19日(月)、22日(木) 15時～15時20分	—	各回24名	—	—
	14	ファミリーショップクイノセ	ファミリーショップクイノセ	ジュエリー簡単お手入れ講座	9月22日(木)10時30分～11時30分	要	4名	—	—
	15	なかいし洋品店	なかいし洋品店	ズボンのすそ直し講座	9月24日(土)、10月1日(土) 13時30分～15時	要	4名	—	—
	16	孫市の会	本願寺観音別院 1階ホール	親子甲斐教室	9月24日(土)10時～15時	要	8名(子ども)	9月22日(木)	2500円
	17	Benefit+plus	Benefit+plus	ポーターズペイント ワークショップ	9月30日(金)13時～15時	要	8名(大人)	—	2000円 (紅茶・お菓子付)
	18	南海薬品	南海薬品	部分痩せ体験	10月1日(土) 14時～14時30分、15時～15時30分	要	10名	9月30日(金)	—
	19	べにや蔵付教室	中国語教室	贈り物体験	10月2日(日)11時～18時	要	—	9月30日(金)	1000円
	20	和歌山市立こども科学館	和歌山市立こども科学館	ふうせんロケットをつくろう	10月2日(日)15時～15時20分	—	24名	—	小人100円 大人300円 (入館料)
手づくりを 楽しむ	21	Uiputiense	Uiputiense	オリジナルアクセサリーづくり	9月15日(木)、30日(金)15時～16時 10月1日(土)、2日(日)13時～14時	要	各回4名	開催前日	2000円～
	22	ホビーショップ サンドウ	ホビーショップ サンドウ	リネンで作るフリルバッグ	9月15日(木)、16日(金)10時～12時	要	4名	—	1776円
	23	Uiputiense	Uiputiense	シュシュヘアバンドづくり	9月16日(金)～29日(木)11時～18時	—	—	—	648円
	24	さんくらふと	さんくらふと	花カチューシャづくり	9月17日(土)、18日(日)10時～18時	要	—	—	1500円～
	25	タキガワメガネ	タキガワメガネ	オリジナルサンクラス	9月22日(木)13時～	要	2組	—	2000円
	26	さんくらふと	さんくらふと	花かんむりづくり	9月24日(土)、25日(日)10時～18時	要	—	—	3000円～
	27	cafe nostalgia	cafe nostalgia	オリジナルプレスレットづくり	9月25日(土)、29日(木)11時～13時	要	各回8名	9月11日(日)	3500円
	28	なかいし洋品店	なかいし洋品店	あったか絵手紙	9月27日(火)10時～11時30分 13時30分～15時 9月29日(木)10時～11時30分	要	各回4名	—	—
	29	ホビーショップ サンドウ	ホビーショップ サンドウ	インリアルモチーフ	9月30日(金)、10月1日(土)10時～12時	要	各回6名	—	1080円
	30	さんくらふと	さんくらふと	オリジナルトートバッグ	10月1日(土)、2日(日)10時～18時	—	—	—	500円
わかやまの 食を味わう	31	Benefit+plus	Benefit+plus	紅茶のテイスティング	9月15日(木)～28日(木)10時～17時	—	—	—	—
	32	南海薬品	南海薬品	ダイエット茶 試飲体験	9月15日(木)～10月2日(日)12時～18時	—	—	—	—
	33	piatto 城下町の八百屋さん	piatto 城下町の八百屋さん	ピクルス作りワークショップ	9月17日(土)、24日(土) 10月1日(土)11時～16時	—	—	—	1000円
	34	JHCフジ	JHCフジ	お菓子づくり講座	9月29日(木)、10月1日(土)10時～12時	要	各回10名	—	1000円
	35	和歌山大学 生涯学習・地域連携センター	水辺座	和歌山うまいもん食堂	10月1日、2日(日)11時30分～14時	—	限定30食	—	—
	36	酒の道場 花野酒店	酒の道場 花野酒店	日本酒好き酒体験	9月30日(金)16時～17時	要	8名(20歳以上)	—	900円
	37	Benefit+plus	Benefit+plus	Bene Café	10月1日(土)、2日(日)10時～17時	—	—	—	500円 (紅茶・お菓子付)
	38	(株)世界一統	世界一統	世界一統 酒蔵見学・試飲会	10月1日(土)14時～15時	要	50名(20歳以上)	9月28日(木)	—
	39	Benefit+plus	Benefit+plus	紅茶の淹れがたレッスン	10月1日(土)14時～15時	要	8名	—	1500円 (紅茶・お菓子付)
	40	(株)聡本家駿河屋	聡本家駿河屋 徳川町本舗	上生菓子づくり体験	10月1日(土)14時～15時30分	要	10名	9月中旬	1000円
	41	べにや呉服店	べにや呉服店	秋のお茶会	10月2日(日)15時～、16時15分	要	各回5名	9月25日(日)	1000円
	42	rogé	rogé	映画とお酒を楽しむ会	10月2日(日)19時～21時	要	10名(20歳以上)	—	1ドリンクオーダー
秋の夜を 楽しむ	43	和歌山大学観光学部 尾久土・中串・木川研究室	本願寺観音別院 南海和歌山市駅前 HIDEOUT CAFE	天体観望会	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	—
	44	和歌山大学観光学部 尾久土・中串・木川研究室	本願寺観音別院	月×落語	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	—
			rogé	月×カクテル	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	1ドリンクオーダー
			CHELSEA	月×パフォーマンス	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	1ドリンクオーダー
			レモネードカフェ	月×マンガ	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	1ドリンクオーダー
			インターラークン	月×音楽	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	1ドリンクオーダー
			HIDEOUT CAFE	月×写真	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	1ドリンクオーダー
			石蔵ホロボロ	月×絵葉書	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	1ドリンクオーダー
			石蔵ホロボロ前	月×VR	9月15日(木)18時～20時	—	—	—	—
	45	市駅まちづくり実行会議	南海和歌山市駅 観音別院間の歩道 観音別院境内	観音別院ライトアップ	9月15日(木)～17日(土) 17時～20時30分	—	—	—	—



図5 上生菓子づくり体験 (No.40) の様子

(3) 実施・運営体制

「市駅まちぐるみミュージアム」全体の主催者は市駅まちぐるみ実行会議とした上で、全体の企画や個別主催者への声かけ、プログラムの取りまとめや調整、広報等は和歌山大学観光学部永瀬研究室が行い、各プログラムの内容や参加条件、日時等の決定は各プログラム主催者に委ねた。

また、これまでに体験プログラムを実施した経験のない主催者が想定されたことに加え、責任関係に対する認識の相違によるトラブル等を防ぐ必要もあったため、各主催者に対してプログラムの実施に関する原則的な規定や、当日の参加者への対応等をまとめたマニュアルを配布した上で、同意書に署名してもらう形をとった。

(4) 情報発信

当企画を含む社会実験「市駅“グリーングリーンプロジェクト”2016」に関する情報発信は、①ポスター、②パンフレット、③ホームページ、④Facebook ページ、⑤マスメディア、⑥デジタルサイネージの6つの媒体を活用して行った。そのうち、当企画の情報発信において中心的に活用したものは、②パンフレット、③Web サイト、④Facebook ページの3つの媒体である。

①ポスター

今回の社会実験全体の内容を告知するポスターは、和歌山大学観光学部北村研究室の協力を得てB2版のものを作成し、8月下旬から、市駅周辺の店舗等のほか、和歌山市内の公共施設・店舗・商業施設・和歌山大学・鉄道駅を中心に約250部を配布した。

②パンフレット

「市駅まちぐるみミュージアム」に特化した情報発信のための紙媒体として、全体像と各プログラムの概要を紹介する独立したパンフレットを、A4サイズの4面見開き版で作成した(図6)。紙面には、各プログラムのイメージ写真付きの概要一覧に加え、実施場所をプロットした和歌山市中心部のマップや、全プログラムを日付順に記載したカレンダーなどを掲載した。パンフレットは企画の詳細を紹介する主力媒体として位置づけ、各プログラムの会場となる店舗や公共施設を中心に、商業施設・鉄道駅・小学校・和歌山大学などに約2000部を配布した。当初は8月中旬の発行を予定していたが、各プログラムの企画の調整や紙面のデザイン等に時間を要し、結果的には9月

初旬に配布することとなった。

③ホームページ

2015年の「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」の実施時にはホームページは開設していなかったが、今回は新たに「市駅まちぐるみミュージアム」の多くのプログラムを発信する必要があったため、社会実験全体の広報媒体として8月初旬に公開した。そのうち「市駅まちぐるみミュージアム」に関しては、前述のパンフレットに先立ち、内容が確定したプログラムの情報を順次更新していった。

④Facebook

Facebook ページは、2015年の「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」に際して開設したアカウントを活用し、各プログラムの告知等をテキストと写真を交えて情報発信するなど、ホームページを補完するものとして位置づけた。

⑤マスメディア等

2016年の社会実験の情報は、同年8月から9月にかけて、地方紙「ニュース和歌山」や県内のフリーマガジン Lism、和歌山市の広報誌「市報わかやま」でも取り上げられたほか、Web メディア「和歌山経済新聞」を通じて Yahoo! ニュースにも掲載された。その他、J:COM チャンネル和歌山の取材も受け、ケーブルテレビでも情報発信を行う機会を得た。

また、9月中旬には和歌山市役所にて社会実験全体の内容に関する記者発表を実施し、市駅前通りでの歩行者天国については、毎日新聞など全国紙の和歌山版にも掲載されている。

⑥デジタルサイネージ

市駅利用者への情報発信ツールとして、9月24日(木)～10月1日(土)の夕方から夜にかけての時間帯に、市駅前の空き地と店舗壁面を利用して仮設スクリーンを設置し、プロジェクトによって社会実験全体の告知動画を投影した。なお動画の作成には和歌山大学学生広報チーム PRism の協力を得た。

その他、「市駅まちぐるみミュージアム」の個別の情報発信に関しては、プログラム主催者が独自に作成したチラシや SNS 等を利用して広報を行う様子も見られた。

Ⅲ. 参加者の反応

1. 参加者アンケートの概要

「市駅まちぐるみミュージアム」の全プログラムを通じて、計1442人(一部概算値を含む)の参加者があった。そのうち、7つの展示・講座プログラム(No.1～6, 8)、主催者が独自にアンケートを行った2プログラム(No.35, 44)、天体観望会(No.43)と鷺森別院ライトアップ(No.45)を除いた34の体験プログラムへの参加者を対象に、参加者の属性やプログラムに対する認識・評価等を把握するためのアンケート調査を行った。参加者には体験プログラム終了時にアンケートに回答してもらうこととし、プログラム主催者に対して、参加者へのア

市駅

まちぐるみ ミュージアム

9.15 (木) ▶ 10.2 (日)

「市駅まちぐるみミュージアム」へようこそ。

和歌山市駅前周辺にある多彩なお店や施設で、特別な体験プログラムをご用意しました。
歴史文化、なりわい、食、手づくり体験など、みんなで楽しめる企画が盛りだくさん！
市駅周辺のまちの魅力を体感してください！ 多プログラム同時開催は2～4面をご覧ください。

**まちぐるみ
ミュージアム**

会場マップ

※会場と隣り合わずには
観る場合があります。

⑥市駅「グリーングリーン」プロジェクト 2016
くすのき広場（伊勢崎通り歩行天国）
9月30（土）～10月2（日）
10時（土）～10時（日）

市駅まちぐるみミュージアム
（プログラム一覧）

- ☐ わかやまの歴史と遊びを知る
- ☐ ごだわりの技術に触れる
- ☐ 手作り絵に楽しむ
- ☐ わかやまの食を味わう
- ☐ 秋の遊具を楽しむ

200m

[illegible]

図6 「市駅まちぐるみミュージアム」のパンフレット（上：1・4面、下：2・3面）

ンケート用紙の配布を依頼した。

アンケート調査の対象となったプログラムの参加者数は427人であり、その33%にあたる139部(20プログラム)を回収することができた。今回は各プログラム主催者が参加者に任意でアンケートへの協力を求めたため、回収率は高くはなく、またプログラムの偏りもあるが、それらの限界を踏まえつつも、一定の傾向を捉えることは可能であると考えられる。

プログラム別の参加者数とアンケート回収部数は表3の通りである。なお表中の「区分」については、今回の企画のために新たに企画されたプログラムを「新規」、既に企画されていたプログラムや定期的に開催されているプログラムを本企画と連携する形で位置づけたものを「連携」とした。連携プログラムは全体の4分の1(12件)であり、4分の3(33件)が新規プログラムに該当する。

表3 全プログラムの参加者数とアンケート回収部数

NO.	プログラム名 (「グレー」欄はアンケート調査の対象外)	参加者数	アンケート 回収部数	区分	備考
1	開業113年 市駅と街の歴史展	520	0	新規	
2	出張！孫市域	53	0	新規	※1
3	紀州の鉄砲蔵治屋による火薬館と小道具展	1	0	新規	※2
4	市博講座 古写真で見る和歌山	64	0	連携	※3
5	市駅まちづくりギャラリー	125	0	新規	
6	ギャラリートーク ヘンリー杉本と北米日本人収容所	3	0	連携	
7	ドールアート マブ女王と首の長老たち	26	2	新規	
8	わかやま歴史講座 紀州藩太田屋と他領の太田屋	33	0	連携	
9	招き猫絵付け体験	2	2	連携	
10	高齢者体験ワークショップ	10	4	新規	
11	ノルディックウォーク体験	15	0	新規	
12	ふくろう笛をつくろう	38	36	連携	※4
13	ストーリー館・ふくろう笛をつくろう	92	0	連携	
14	ジュエリー簡単お手入れ講座	0	0	新規	
15	ズボンのすそ直し講座	0	0	新規	
16	親子甲斐教室	10	0	連携	
17	ポーターズイベントワークショップ	1	1	新規	
18	部分痩せ体操	0	0	新規	
19	着付け体験	3	3	新規	
20	ふうせんロケットをつくろう	57	0	連携	
21	オリジナルアクセサリーづくり	1	1	新規	
22	リネンで作るフリルバッグ	3	0	連携	
23	ショショ・ヘアハンドづくり	5	4	新規	
24	花かチューシャづくり	1	1	新規	
25	1からつくるオリジナルサングラス	0	0	新規	
26	花かんむりづくり	0	0	新規	
27	オリジナルプレスレッドづくり	11	9	新規	
28	あったか脱手紙	2	2	新規	
29	UVレジンで作るイニシャルモチーフ	2	0	連携	
30	オリジナルノートバッグ	3	3	新規	
31	紅茶のテイストンク	0	0	新規	
32	ダイエット茶 試飲体験	60	7	新規	※5
33	ピクルス作りワークショップ	25	25	新規	
34	お菓子づくり講座	1	1	新規	
35	和歌山うまいもん食堂	60	0	新規	
36	日本酒好き酒体験	0	0	新規	
37	Bene Café	12	5	新規	
38	世界一級 酒蔵見学・試飲会	25	17	新規	
39	紅茶の淹れかたレッスン	5	4	新規	
40	上生菓子づくり体験	11	11	新規	
41	秋のお茶会	6	1	新規	
42	映画とお酒を楽しむ会	0	0	新規	
43	茶体験講座	30	0	連携	※5
44	お月見カフェ	46	0	連携	※6
45	蔵探ライトアップ	80	0	新規	※5
計		1442	139		

※1 来場者数はNo.3「火薬館と小道具展」の参加者を含む。

※2 来場者数はNo.2「出張孫市域」の参加者を含む。

※3 期間中開催は2回であったが、全4回分の来場者数のみ判明しているため、半数を来場者数とみなした。

※4 アンケート回収部数は同主催者によるNo.13、20を含む。

※5 来場者数は概算値。

※6 アンケート回収部数を来場者数とみなした。

2. 参加者アンケートの結果

(1) 居住地

回答者の居住地は「和歌山市内」104名(75%)、「和歌山県内」21名(15%)、「大阪府」13名(9%)、「その他」1名(1%)となった。全体の9割が和歌山県内、4分の3が和歌山市内からの参加者であり、その他には京都府からの

参加者が含まれる(図7)。「和歌山市内」からの参加者の内訳は、「城北地区」13名(14%)、「雄湊地区」4名(4%)、「本町地区」1名(1%)、「その他」77名(81%)であり、近隣の地区以外からの参加者の方が多いことが分かる(図8)。

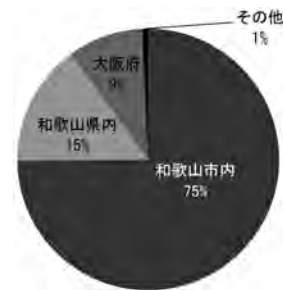


図7 参加者の居住地 (n=139)

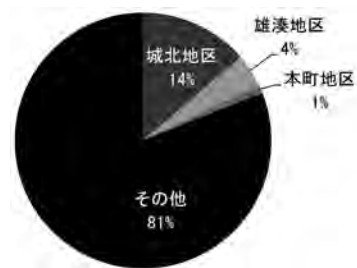


図8 市内居住者の内訳 (n=95)

(2) 性別・年齢

回答者の性別は、「男性」21名(15%)、「女性」109名(78%)、「未回答」9名(7%)であり、約8割が女性であった(図9)。年齢は、「10代未満」2名(2%)、「10代」5名(4%)、「20代」13名(9%)、「30代」32名(23%)、「40代」50名(36%)、「50代」23名(17%)、「60代」11名(8%)、「70代」2名(1%)、「80代以上」0名であり、一般に仕事や子育て等の中心的な担い手である30代～50代が約8割を占めている(図10)。

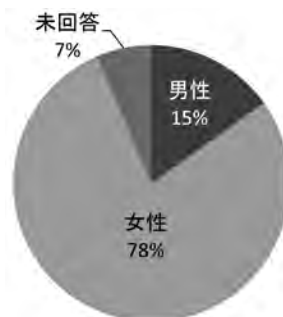


図9 性別 (n=139)

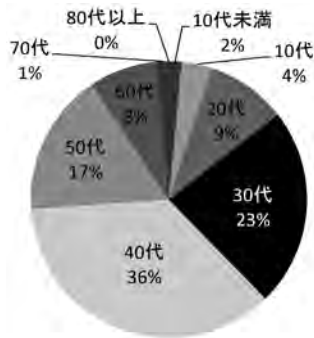


図 10 年齢 (n=138)

(3) 同伴者

参加・体験時の同伴者については、「家族」59名(42%)、「友人・知人」47名(34%)、「一人」29名(21%)、「その他」4名(3%)という回答が得られた(図11)。約8割が2人以上での参加であり、次に示すように、友人・知人からの口コミによる宣伝効果の大きさも窺える。

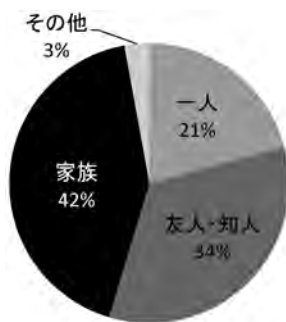


図 11 同伴者 (n=139)

(4) プログラムを知ったきっかけ

回答者がプログラムを知ったきっかけは、「友人・知人」(51名)、「Facebook」(17名)、「ポスター」(13名)、「パンフレット」(12名)、「ホームページ」(7名)、「新聞・タウン誌」(3名)、「テレビ・ラジオ」(1名)、「その他」(24名)である(図12)。「友人・知人」と「Facebook」を合わせて5割強を占めており、情報発信の主力媒体として位置づけたパンフレットやホームページよりも、個人的なつながりやSNS等による口コミによって情報を入手した参加者が多かったと考えられる。

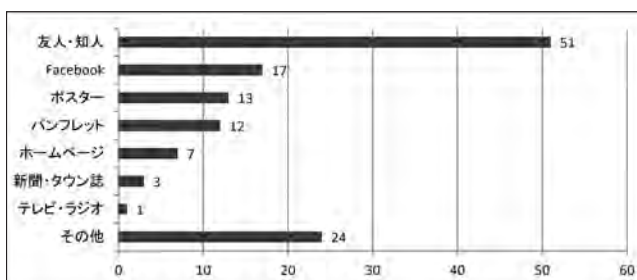


図 12 プログラムを知ったきっかけ (複数回答, n=128)

(5) 参加プログラムの満足度

参加プログラムに対する満足度は、「とても満足」72名(52%)、「満足」43名(31%)、「普通」4名(3%)、「未回答」20名(14%)であり、「やや不満」「不満」の回答は見られず、8割以上の参加者が満足していることがわかった(図13)。さらに、連携プログラムを除き、今回新たに実施したプログラムのみで集計したところ、回答者のプログラムの満足度は、「とても満足」64名(63%)、「満足」32名(32%)、「普通」1名(1%)、「未回答」4名(4%)となり、満足している回答者の割合は95%に上昇する結果となった(図14)。

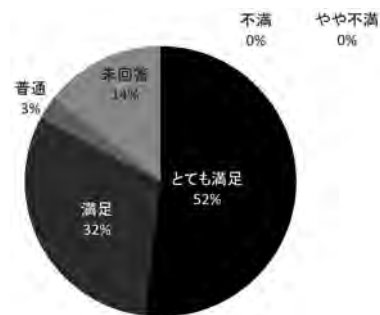


図 13 プログラムの満足度 (n=139)

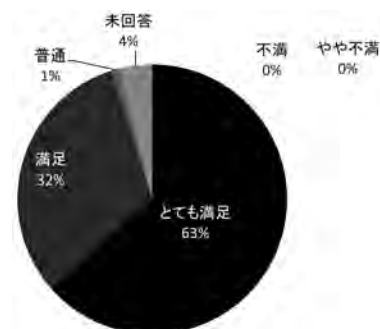


図 14 プログラムの満足度：新規プログラムのみ (n=101)

さらに、前述の(4)「プログラムを知ったきっかけ」の回答内容に応じて、「友人・知人」からの口コミとその他の広報媒体に分けて満足度のクロス集計を行った¹²。口コミによる参加者は「とても満足」が80%、「満足」が16%を占めるのに対し、広報媒体による参加者は「とても満足」が35%、「満足」が39%となり、知り合いがかなり好意的に評価していることが窺えるのに対し、後者が一般的な評価を示していると思なすことができる。とは言え後者においても、「とても満足」「満足」を合わせて7割以上を占めている点は一つの成果と言える。

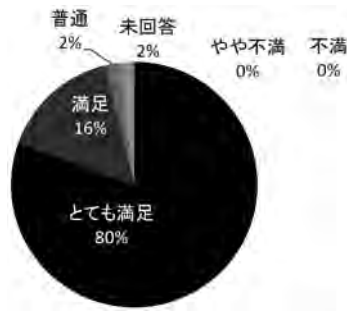


図 15 プログラムの満足度 / きっかけ=友人・知人 (n=51)

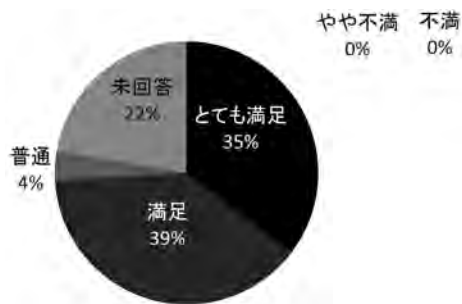


図 16 プログラムの満足度 / きっかけ=広報媒体 (n=85)

(6) 今後まちなかで参加したい体験プログラム

今後和歌山市のまちなかで体験してみたいプログラムについて複数回答で尋ねたところ、「手づくり体験」(87名)、「食体験」(83名)が突出して多く、次いで「工場見学」(37名)、「ガイドまち歩き」(18名)、「歴史文化体験」(17名)、「その他」(1名)の順となった(図17)。今回のプログラムも「手づくり体験」や「食体験」が多く、それらへの満足度も高かったことから、同様のプログラムに今後も参加してみたいという回答につながったものと推察される。

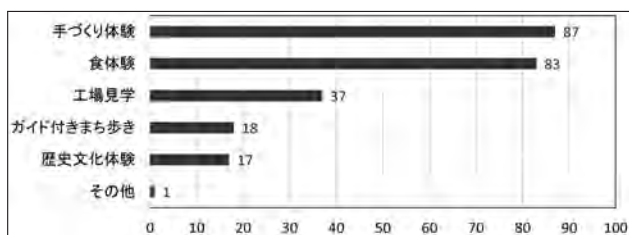


図 17 今後まちなかで参加したい体験プログラム(複数回答, n=243)

(7) 関連企画への参加

「市駅「グリーングリーン」プロジェクト2016」の関連企画である「市駅前通り歩行者天国」、「市堀川クルーズ」への参加／参加意向について尋ねたところ、「利用した」「利用する予定」を合わせて、前者は33%、後者は15%という結果となった(図18、19)。個人的な事情や関心にもよるため、この結果が意味するものを一概に判断することはできないが、

参加者の立場から見て、「市駅「グリーングリーン」プロジェクト」の一環として「市駅まちぐるみミュージアム」を位置づける必要性があるか否かについては、検討の余地がある。

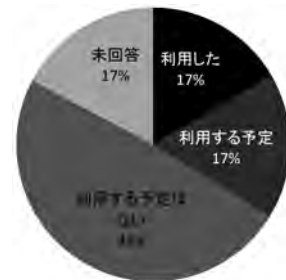


図 18 市駅前通り歩行者天国への参加 (n=139)

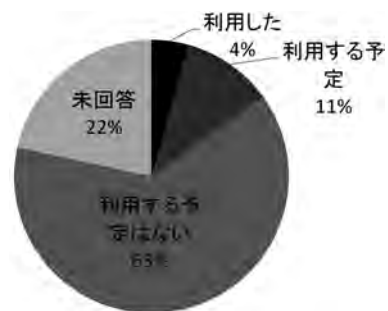


図 19 市堀川クルーズへの参加 (n=139)

(8) 他プログラムへの参加

「市駅まちぐるみミュージアム」の他のプログラムへの参加については、「参加した」27名(19%)、「これから参加するつもり」30名(22%)、「参加する予定はない」49名(35%)、「未回答」33名(24%)となり、約4割の参加者が他のプログラムにも参加する予定であることがわかった(図20)。またその内訳については、いくつか突出したプログラムが見られるとともに、回答者の興味は多くのプログラムに分散していることも窺える(図21)。



図 20 「市駅まちぐるみミュージアム」の他のプログラムへの参加 (n=139)

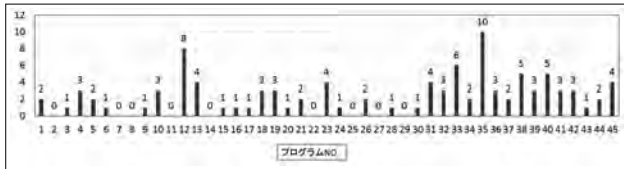


図 21 参加した / 参加する予定のプログラム (n=102)

(9) 次回もこのような企画があれば参加したいか

次回も「市駅まちぐるみミュージアム」のような企画があれば参加したいかを尋ねたところ、「ぜひ参加したい」53名(38%)、「参加したい」65名(47%)、「どちらともいえない」13名(9%)、「未回答」8名(6%)となり、「あまり参加したくない」「参加したくない」という回答は見られず、約8割が参加を希望する結果となった(図22)。またこの設問に関しても、(4)の回答内容に応じてクロス集計したところ、友人・知人からの口コミによる参加者は「ぜひ参加したい」42%、「参加したい」44%、広報媒体による参加者は「ぜひ参加したい」34%、「参加したい」50%となった。前者の方が好意的な評価をしているものの、いずれも「ぜひ参加したい」「参加したい」を合わせると8割を超えており、参加したプログラムに対する満足度の高さが反映されたものと考えられる。

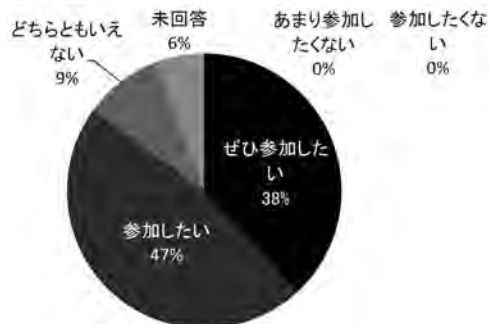


図 22 次回も参加したいか (n=139)

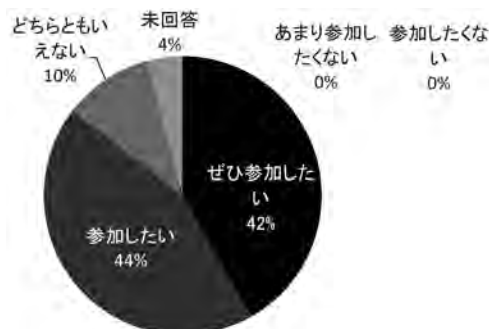


図 23 次回も参加したいか / きっかけ=友人・知人 (n=48)

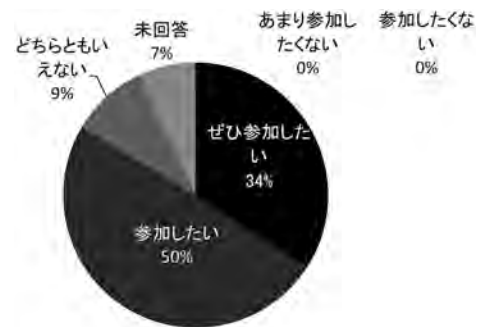


図 24 次回も参加したいか / きっかけ=広報媒体 (n=85)

3. 企画全体に対する自由記述

アンケートの最後に設けた自由記述欄からは、「楽しかった」といった声が多く挙げられ、「珍しい企画で、主婦も楽しめました」「家族でゆっくり過ごせました」「子供が喜びました」など、幅広い世代の参加者がプログラムを楽しんだことが窺える。また、「1つ1つ丁寧に職人技を見ることができ、和菓子の良さを再確認できました」「丁寧に説明をうけた」「店主さんのお話がとても好きなので、寄らせていただいて本当に良かったです」「市内にこういうところがあったのだという新たな発見ができた」など、店主と参加者の交流も好評だったことを窺わせる記述もあり、体験プログラムを通し、企画本来の趣旨である、市民が市駅周辺の生業・歴史・文化に関心を持つきっかけを提供することも一定程度達成されたものと考えられる。

一方で、今回の企画の問題点については、「知ったのが遅かったので、PRをもっとして欲しかった」「友人に教えてもらうまで、このような企画があることを知りませんでした」「地元以外ご存知の方が少ないと思うので、PRの工夫をもっとしてほしいです。もっと早く知っていれば、参加したかったという方々も居らしたので。」という意見が多く、情報発信の不十分さが浮き彫りとなった。また、「今回は、こども科学館に来たから参加できたのであって、来ていなければわからなかったです」「アンケートの意図がわからないので書きようがありません」との意見もあり、参加プログラムが必ずしも「市駅まちぐるみミュージアム」の枠組みの中で認識されていないケースがあることも明らかとなった。

全体を通して、参加者の満足度は高く、今後の開催に対する参加意欲も見られることから、情報発信のあり方を工夫・改善しながら継続的に開催することで、潜在的な需要をさらに掘り起こすことも可能であると考えられる。またそのことを通じて、市駅周辺の魅力の掘り起こしと発信も着実に促されるものと言えよう。

IV. プログラム主催者の反応

1. 主催者アンケートの概要

参加者へのアンケート調査に加えて、各プログラムを企画・運営した個別の主催者(以下、主催者)の認識や、運営上

の課題等を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。「市駅まちぐるみミュージアム」の期間終了後の10月中旬より、29のプログラム主催者のうち、和歌山大学関係者を除いた26の主催者に対してアンケート調査への協力を依頼し、用紙を配布したところ、2016年10月末までに22部を郵送により回収することができた。回収部数は少ないが、対象者の8割以上から回答を得ており、各主催者の反応の傾向を捉えることができると考えられる。以下では主催者側の反応から、プログラム実施の成果と課題を整理する。

2. 主催者アンケートの結果

(1) 企画趣旨の理解

今回の協力依頼に際しての企画趣旨への理解について尋ねたところ、「よく理解できた」10名(45%)、「それなりに理解できた」12名(55%)となり、「あまり理解できなかった」「まったく理解できなかった」という回答はなかった(図25)。和歌山市内ではほとんど例を見ない試みではあったが、独自に今回のような体験プログラムを実施してきた店舗等も存在したことから、おおむねイメージも伝わり、理解が得られたものと考えられる。

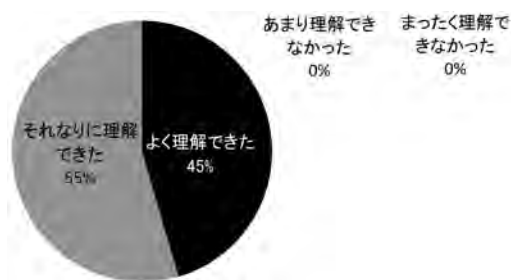


図25 企画趣旨の理解 (n=22)

(2) 協力依頼時の受け止め方

「市駅まちぐるみミュージアム」への協力依頼時の主催者の受け止め方についての設問では、「ぜひ協力したいと思った」12名(55%)、「なるべく協力したいと思った」8名(36%)、「多少の不安があり、協力すべきか迷った」2名(9%)との回答が得られた(図26)。依頼した時点で協力に対して前向きな意思を持っていた主催者が多かった一方で、これまで経験のない主催者にとっては、提供可能なプログラムや参加者の反応について、少なからず不安を抱えていたことも窺える。

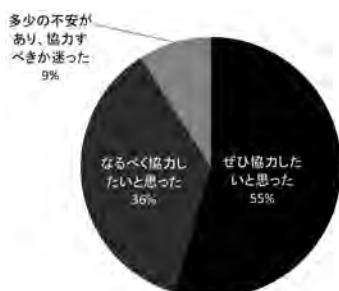


図26 協力依頼時の受け止め方 (n=22)

(3) 協力に際しての動機

今回の企画への協力に際しての動機について複数回答で回答してもらったところ、主催者自身の「店舗の売り上げ向上」(4名)や「店舗・活動の宣伝効果」(11名)以上に、「まちの活性化に貢献すること」(18名)を大半の主催者が挙げている点が着目される(図27)。和歌山市内で事業や生活をしてきた立場からすれば、衰退を続けるまちの活性化は不可欠のものとして認識され、そのような取り組みに少しでも協力したいという意思が窺える。また「その他」の自由記述においては、「学生からの提案に協力すること」という意見も見られた。

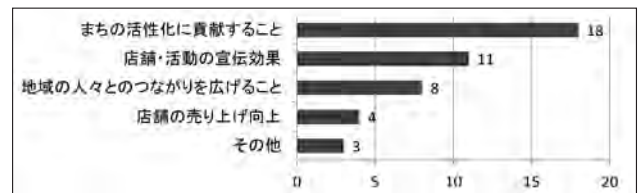


図27 参加に際しての意識 (複数回答, n=44)

(4) プログラムの企画者

今回の提供プログラムの企画者に関する質問¹³では、「主催者本人が企画」18件(60%)、「学生と相談しながら企画」7件(23%)、「従業員等のスタッフと相談しながら企画」2件(7%)、「学生が企画」3件(10%)と、大半のプログラムは主催者自身が主体となって企画されたことが分かる。なお「主催者本人が企画」との回答があった18件のプログラムの中には、「市駅まちぐるみミュージアム」の協力依頼前から独自に体験型プログラムを企画・実施していたものも含まれる。今回、それらの主催者との連携関係も構築することで、より多くのプログラムを実施することが可能となった。

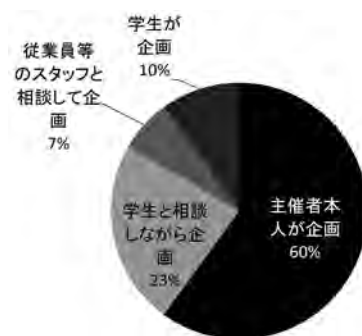


図28 プログラムの企画者 (n=30)

(5) 開催当日の運営について

開催当日の運営を円滑に進めることができたかについて、「はい」「いいえ」の2択で尋ねたところ、プログラムの運営を実施した19の主催者全てが「はい」と回答し、開催当日には大きな問題点やトラブル等がなかったことが分かった。

(6) 参加者の反応

主催者側から見た参加者の反応について、「好評だった」「あまり好評でなかった」「どちらとも言えない」「よく分からない」の4つの選択肢から回答を得た結果、展示形式で参加者の反応を見ることができなかったプログラムや、参加者がいなかったプログラムなどを除いた17の主催者全てが「好評だった」と回答した。この点は、参加者アンケートの満足度や自由記述等の内容とも一致し、良好な雰囲気の中でプログラムが実施されることが窺える。

(7) 参加者の反応で気付いた点・気になった点

参加者の反応で気づいた点・気になった点を自由記述で尋ねた項目では、「市駅まちぐるみミュージアム」が「市駅“グリーン・グリーン”プロジェクト2016」の企画の一環であるということを理解したうえで参加者が少なかったという意見が多く見られた。この点は参加者アンケートからも把握された課題であり、参加者の視点からも分かりやすい位置づけや情報発信のあり方を検討する必要がある。

(8) 取り組みを通じて良かった点

今回の取り組みを通じて良かった点を複数回答で尋ねたところ、最も多く挙げられたのは「参加者との交流を楽しむことができた」(12名)であり、主催者自身の満足感や充実感を生むことができたことは、持続的な取り組みを行っていく上でも重要な成果であると言える。次いで「自身の店舗や活動を見直すきっかけとなった」(8名)、「企画の検討を楽しむことができた」(7名)、「参加者に店舗や活動について興味を持ってもらうことができた」(7名)との回答が多く、「市駅まちぐるみミュージアム」の実施を通して、主催者自身が自身の生業や活動等の価値を再認識することができたことが窺える。一方で、「地域が一体となり取り組んでいるという連帯意識を共有することができた」(4名)、「地域の人との新たな出会いやつながりを深めることができた」(3名)といった点を挙げた主催者は限られ、各プログラムの主催者相互が横でつながる機会には特に用意していなかったため、地域コミュニティの連帯意識の醸成には必ずしも直結しない点も明らかとなった。

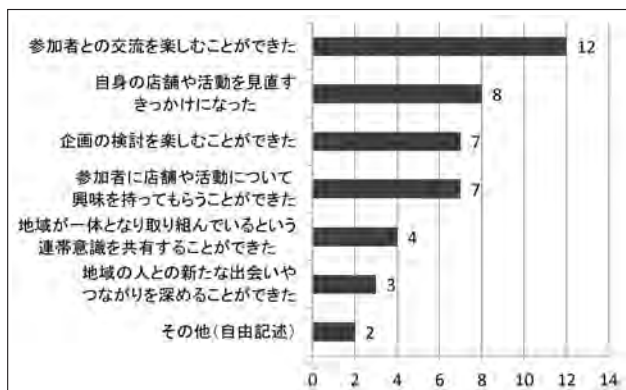


図 29 取り組みを通じて良かった点（複数回答，n=43）

(9) 取り組みを通じて困った点や苦労した点

今回の取り組みを通じて困った点や苦労した点を複数回答で尋ねたところ、多くの主催者が「参加者の募集」(7名)、その要因となった「告知・広報の遅れ」(5名)を挙げており、今回参加者の得られなかったプログラムが存在することも踏まえると、これらは改善すべき重要な課題であるといえる。また、「通常の営業や活動との調整」(4名)や「企画の準備」(4名)といった点は、通常の営業・活動等と両立させる上でも重要な点である。各主催者にとって無理のないプログラム運営のために、それらの点への配慮やサポートのあり方を検討する必要がある。

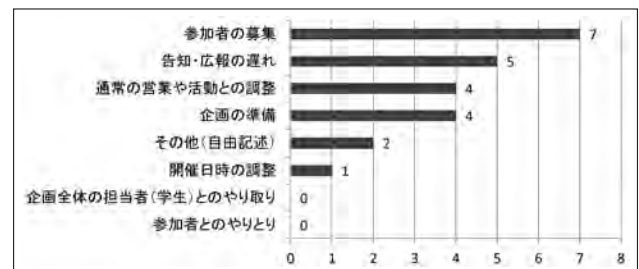


図 30 取り組みを通じて困った点や苦労した点（複数回答，n=23）

(10) 今後の改善点

今後の改善点に関する設問では、「広報(ポスター、パンフレット、Web サイトなど)」「開催時期・期間」「プログラムの数」「プログラムの内容」「その他」の5つの選択肢に加え、それらの改善すべき点について具体的に述べてもらう自由記述欄を設けた。選択肢・自由記述欄ともに、「広報のタイミングが遅い」「ポスターやパンフレットをもっと分かりやすくした方がよい」「ホームページや Facebook の更新を強化してほしい」など、ここでも広報面に関する指摘が目立った。一方で、体験プログラムそのものへの指摘は比較的少なかったことから、情報発信のあり方を改善・強化することができれば、今回と同様のプログラムにより「市駅まちぐるみミュージアム」を実施できる可能性は十分にあると考えられる。

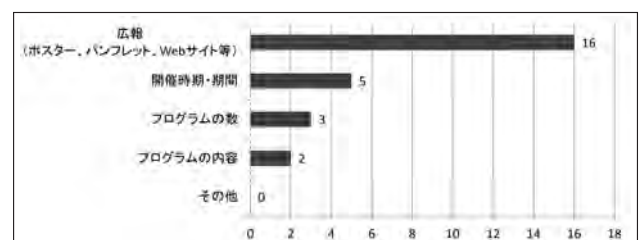


図 31 今後の改善点（複数回答，n=26）

(11) 今後の協力に対する意向

今後も「市駅まちぐるみミュージアム」が開催されるならば協力したいかどうかを尋ねたところ、今年限りの参加を前提としていた1主催者を除いては、「ぜひ協力したい」(10名)、「な

るべく協力したい」(10名)との回答が得られ、次回以降の開催に対しても前向きな意思が示された。また、併せて回答理由を尋ねたところ、「エリア全体の活性化や魅力向上につながってほしいから」「和歌山の歴史や文化を伝える絶好の機会だから」「地域の人々とのふれあいや地元のコミュニティの結束感が良かったから」などの回答が多く、今回の企画の趣旨そのものに対し大きな共感が得られていることも窺えた。

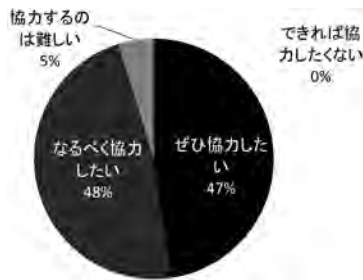


図 32 今後の協力に対する意思 (n=21)

(12) 今回の企画全般に対する自由意見

最後に、「市駅まちぐるみミュージアム」および「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」への意見や感想等に関する自由記述欄を設けたところ、まちぐるみミュージアムに取り組んだこと自体が「楽しかった」「励みになった」といった前向きな記述が多く見られた。一方で、「主催者・参加者ともにより多くの人々に参加してほしい」「地域を巻き込み、みんなで分業することが重要」など、今後の運営体制に対する意見も見られた。このような取り組みについて、「継続させたい」「今後の発展に期待」といった記述も見られ、ここでも今後の開催に向けた主催者側の意思を確認することができた。

V. 結語

本稿では、市駅周辺の一般市街地における地域資源の体験プログラム「市駅まちぐるみミュージアム」の実践例を取り上げ、その実施・運営内容と体制等について整理するとともに、参加者とプログラム主催者の反応について、アンケート調査の結果をもとに検証した。

今回の試みは、観光の視点を取り入れつつ、まちなかの地域資源に対する市民の認識を促すとともに、今後のまちづくりに向けた地域の連帯意識を醸成することを重視して実施したものである。その趣旨からすれば、民間の店舗・事業者・団体と行政、大学の立場を超えて連携し、計45ものプログラムを企画・発信できたこと自体、和歌山市内では前例のない試みであり、大きな成果であったと言える。このことは、地域の商店街と自治会、大学研究室の連携による公益的かつ地域に密着した活動母体としての「市駅まちづくり実行会議」が主催し、中立的な立場から行政・民間・大学をつなぐ役割を果たすことにより実現できたとも言える。

また、人口流出と高齢化の進む和歌山市中心部において、

各プログラム主催者の熱意と工夫により、比較的若い世代の女性を中心とした層を呼び込むことができ、アンケート調査の結果からも、関係者の友人・知人以外も含めて、参加者の多くが好反応を示したことが窺える。さらに主催者自身からも一定の充足感と今後の協力に対する積極的な意志が示されたことは、こうした取り組みを継続する上で大きな推進力になり得る。

一方で、今回は社会実験全体の予算・人材・準備期間に限られる中で¹⁴、必ずしもイベント運営の実務面に熟達していない筆者らの大学研究室が中心となって、歩行者天国等の企画と並行して試行錯誤を重ねながら企画・調整や広報を担った。このため、企画全体のマネジメントに関しては、多くの課題が残されている。まちづくりの視点から出発した企画とは言え、観光の視点を取り入れたイベントは、一定の集客がなければ成立しない。その点から特に重要な情報発信に関しては、参加者・主催者の双方のアンケート結果も示すように、宣伝媒体の不完全さや、広報開始時期の遅れ等により、十分な対応ができたとは言いがたい。今回のために新たに用意されたプログラムのなかには、残念ながら一人も参加者がなかったものも複数見られ、ターゲットの設定や魅力の伝え方など、プログラム主催者による企画を必要に応じて支援しつつ、情報発信の方法を工夫することは大きな課題である。

さらに、企画全体の主催者（市駅まちづくり実行会議）の立場から見れば「まちぐるみ」の協力関係が築けたとは言え、各プログラム主催者間の横のつながりは希薄であり、今後は主催者どうしの情報共有や交流の場を設けることで、地域における連帯気運を実質的に深めていくことも重要であろう。

加えて、今回の18日間という期間や、開催時期の設定のあり方についても、参加者にとっては個々のプログラム実施日が拡散したために「まちぐるみ」の企画であることを実感し難かった点や、他のイベントとの開催時期の重なりにより、対外的な発信力が弱まったことも考えられ、さらなる検討の余地がある。

以上の課題を踏まえつつ、今後の持続的な展開のためには、大学が地域との連携関係のもとでまちづくりに対するビジョン構築を担いつつ、効果の予測・検証を行いながら企画の骨格を発展させ、地域の人材発掘や関係者のコーディネーションに精通した民間事業者等がマネジメントや広報等の実務を担い、行政が公的位置づけを与えて情報発信をサポートするなど、公民学の適切な役割分担と連携により、企画全体のマネジメント体制を拡充させることが極めて重要である。そのような協働のプラットフォームを地域が主体となって構築し、衰退した市街地の再生に資する「観光まちづくり」の展開を描く上で、「市駅まちぐるみミュージアム」は一つの可能性を示したと言える。

参考・引用文献

- 十代田朗(2011)「都市と観光 その2-タウン・ツーリズムの実践と課題-」(原田順子・十代田朗編著(2011)『観光の新しい潮流と地域』放送大学教育振興会, pp.82-95)
- 西村幸夫編著(2009)『観光まちづくり:まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社
- 森重昌之(2015)「定義から見た観光まちづくり研究の現状と課題」『阪南論集 人文・自然科学編』50(2), pp.21-37
- 吉澤清良・福永香織・後藤健太郎・小池利佳(2014)「地域活性化手法としての“オンパケ”に関する研究」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』29, pp.129-132
- 橋口敏一・村上佳代・西山徳明(2011)「「萩まちじゅう博物館」における文化遺産マネジメントに関する研究 その8:主客交流に主眼を置いたサテライトの設計条件の抽出」『日本建築学会研究報告(九州支部)』計画系(50), pp.449-452
- 仲野綾・西山徳明・有川智子・吉村重昭(2005)「「萩まちじゅう博物館」における文化遺産マネジメントに関する研究 その3:NPO設立と文化遺産マネジメントに関わる主体」『日本建築学会研究報告(九州支部)』計画系(44), pp.521-524
- 伊藤興一ほか(2009)「旧佐原市地区におけるまちづくり型観光政策の形成プロセスとその成立要因に関する分析」『社会技術研究論文集』6, pp.93-106
- 井口奈美(2016)『公民学の連携・協働の駅前まちづくりに関する研究-和歌山市駅周辺市街地を事例に-』和歌山大学観光学部平成27年度卒業論文
- 井口奈美・永瀬節治・前田航一(2015)「市駅まちづくりワークショップを通じた駅前市街地再生の展望と課題:地方都市の駅を中心とした公民学協働のまちづくりに関する研究 その2」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)』pp.31-32
- 永瀬節治・尾関智彦・山中啓・横江那美(2016)「地域主体の市駅前通り社会実験の企画と実施体制:公民学連携による地方都市の駅前市街地再生に関する研究 その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)』pp.553-554
- 山中啓・尾関智彦・横江那美・永瀬節治(2016)「市駅前通り社会実験における「緑と憩いの広場」の具現化と来場者の反応:公民学連携による地方都市の駅前市街地再生に関する研究 その4」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)』pp.555-556
- 横江那美・尾関智彦・山中啓・永瀬節治(2016)「市駅前通り社会実験に対する住民の反応:公民学連携による地方都市の駅前市街地再生に関する研究 その5」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)』pp.557-558
- 尾関智彦・横江那美・山中啓・永瀬節治(2016)「市堀川クルーズの試行を通じた水辺活用の可能性と参加者の反応:公民学連携による地方都市の駅前市街地再生に関する研究 その6」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)』pp.559-560

注

- 観光庁 HP「ニューツーリズムの振興」http://www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html (2017年3月29日閲覧)
- 十代田(2011)は、有名観光地等で非日常的感觉を味わう従来型のマス・ツーリズム(狭義の観光)と、日常の生活感を伴う「リゾート」の中間に、これまで観光地ではなかった地方都市等で展開される「オルタナティブ・ツーリズム」を位置づけ、その体験のありようを「異日常」と表現している。(文献1, pp.83-85)
- 森重(2015)は、近年の「観光まちづくり」に関する研究・文献をレビューした上で、それらにおいて提示される同語の定義を分析した結果として、その概念が、①地域社会が主体になる、②地域資源を

活用する、③交流を促進する、④まちの魅力や活力を高める、の4つの要素から構成されていることを明らかにしている。

- 同上, pp.26-28
- 文献4
- 文献5, 6
- 文献7
- 市駅まちづくりワークショップの取り組みについては、文献8, 9, …を参照。
- 2015年5月に、南海電鉄と和歌山市による市街地再開発事業として、南海和歌山市駅ビルの建て替え(市民図書館との複合化)、駅前広場の再整備等を含む「和歌山市駅活性化構想」が発表された。2017年3月には第一期工事のオフィス棟が竣工し、2019年には図書館棟、2020年にはホテル等・商業棟が竣工する予定である。
- 2015年の市駅“グリーングリーン”プロジェクトについては、文献8, 10, 11, 12, 13を参照。
- 民間のプログラム主催者のうち、店舗経営を行っている企業や個人事業主は「店舗」、その他の民間事業者は「事業者」とした。
- (4)で複数項目を選択した14名を除く計114名分についてクロス集計を行った。
- 主催者が複数のプログラムを実施した場合はプログラムごとに回答を求め、計30件のプログラムについて回答が得られた。
- 「市駅“グリーングリーン”プロジェクト2016」の全体の資金源として、和歌山県海草振興局の「地域・ひと・まちづくり補助事業」や商店街関係の補助金、市駅前通り歩行者天国のマーケット出店料をはじめとする運営収入等を当てているが、支出の大半は歩行者天国の設営・警備や市堀川クルーズの運営に関するものであり、「市駅まちぐるみミュージアム」に当てることのできた予算は広報費用等に限定された。